

經典餘師

近思錄

一

口 11

1029

39

天保癸卯孟春

1029
卷 39

讚岐百年先生述

經典
餘師近思錄之部
卷十

浪華
森本三書堂合刻



自序

學問之道、無它、博文約
禮而已矣、博文、讀書
接物、以多其見聞、皆是
也、約禮者、收斂其博、而

歸之於踐履是也。聖法
醫藥，省君臣佐使，佐
也使也，亦皆臣也。以三
臣而輔一君也，非以一君
而役於三臣也。故約禮

君也，博文臣也。古之君
子多其臣者，欲以成其
君也。後世學者遺棄其
君而唯其臣，是取將以
誇其濟之多也，不亦

左乎、朱文公編此書、名
以近思、其意雖在自卑
升高、自迫及遠、而其患
後世學病之如是、而欲
以省瘳之也、蓋亦有焉

余也不自揣、嘗以國字
略解四子六經及小學
書、以便童蒙、今又取此
書解之、願讀者能內視
而不外驚云爾、

天保壬寅夏六月

讚岐百年溪撰



雲樓早瀨乾瑞書



讀法

近思錄餘師卷之二

道體類凡五十一條

濂溪先生曰
無極くわく而大極たいくく

近思錄餘師卷之一

溪氏譯

道體類凡五十一條

濂溪先生曰無極而大極

仲で

て高くかぎりなく日月星辰青黄赤白黒の雲霧霞
霽あり名付て天と云ふ俯して下は山川滄海土
田林木叢林あり名付て地と云ふ以上との分る眼より
所の天地ありその實は一つ天ふしてそのうち地
球あり依て廣大至極を名とて大極といふなり
あるれども廣といふ極といふと分るありて限あり
るふ初より云ふよつて空々混沌究極なるをいふ天地
始初のその前を説又陰陽の分るは其の前をいふ
朱子云無極といふより太極祖徳も易にあらずハ
朱子云を得るより伊仁齋是を誦るはうなり

非動也而生太極動而生

大極動而陽

陽動極而靜靜而生陰靜極復動一

靜而動

動一靜互為其根分陰分陽兩儀立

陰而生

焉

根動

動一靜互為其根分陰分陽兩儀立

陽分

陽變陰合而

陽變

生水火木金土五氣順布四時行焉

生五氣

陽變動而陰合從五行之氣

四時

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

陽變

陽變動而陰合從五行之氣

五行陰陽
陰陽一太極
太極一
無極

五行の生じる也
各其性を一と
無極の真二五
の精妙合て而凝

の一年と又これを五氣順布
と四季の時節行焉とをいふ
五行一陰陽
也陰陽一太極也太極本無極也
土金水の五行何れも其体質を異なり四季土用何れ
も冷暖寒熱の気を異ふとんども皆陰陽を離るる

陰陽一と五行も陰陽の一より出るものなり
太極といふ名あれども実の右ふ
五行之生也

各一其性無極之真二五之精妙合

而凝
太極より陰陽の二儀を生じ而儀より五
行を生じ火の熱を水に冷然と各々

その性質を一とふして互に分別居り又極真実
混沌たる本体より陰陽の二つ水火木金土の五
行精妙の吉祥なる一氣各々合體して形
質を凝成する奇々妙々なり更なりとぞ **乾**

乾道ハ男を成
坤道ハ女を成
二氣交感して
萬物を化生
萬物生じ生じ
て變化窮る
焉

惟人也其秀
得而最靈
形既生矣神
發而知矣五
性感動而善
惡分萬物出
矣

道成男坤道成女二氣交感化生萬

物萬物生而變化無窮焉
一の數より一二三と物を生ずるは元の源本より本
根より人までハ男より坤ハ陰よりハの數よりハ方

又われ物を産するは乾を父と坤を母と
夫婦の二氣あるは人の
夫婦の二氣交感して万物を生ずるは
さる段々と生じて人間を成るは世の内の草木鳥獸
千變万化何一つ不窮

惟人也得其秀而

最靈形既生矣神發知矣五性感動

而善惡分萬事出矣
天地の間ありけるもの
勢一と一とあり

木卉草のれいひの無情のもののあき
あるものも又勢一と一とあり人間世
界なるは万事

柔と剛とを立て仁と
義とを立て

又曰く始を原ね
終も反る故に死
生の説を知る大
哉易也斯を其
れ至矣

惡あり 誠まことハ五い爲ため幾いく善ぜん

曰仁與義

聖人天地人三の道を立たまひて人々

と讀て天道てんどう小て六雨おれふりつゞけ氣き死し困て病やまひを母ははのみど
之陽やうとハもんぐーあねーろくとよきて年としぐーよ

世間よのまへいさめしきあり柔どくハ柔まろ和わとよみてあつふふすまを
るゝ剛こくハきよくかたきとて総すべて地ちみとゞちまのるやう

木鳥獸をとりて人の氣を生むるを仁と上より下を恵たまふを義とハ義理作法のことなり

又曰原始ニル反終ニル故知ニル死生之說大哉ナルカニ

易也斯其至矣

始はじめをもと原もとううぐぐるるハ本もと々々終はつるる
反へるるハ未いまだだりり登のぼるるああままバ夜よるる

又同断なりきりふ存ぞん命いのちをねぐみ死しするも何忌いみきりふ

て迷^{まよ}ひ^をと^る有^し不^せ也^もと^て未^な代^ごの^の有^る天^{てん}
地の^{ちの}間^ま万^{ばん}物^{ぶつ}万^{ばん}道^{だう}理^りと^もて^て易^{えき}は^は備^び具^ぐ故^こは^は大^{だい}哉^やと^と

るく斯其至極
ふく道あり

○誠無爲幾善惡

実誠
正せい直ちち小真

徳ハ愛ヲ仁ト

曰宜を義と曰理

禮と曰通

る。紙智と曰。守る
を信と曰。

智守曰信

徳と得の字の義と相似なり但得の
字ハ吾手ハ入るなり徳の字ハ心ニ意

得て悟得たるを以て仁心とて人物を愛しあはれむこと
義と人身持行変の道と合て作法宜き故に礼と人

人の身の分限さどなり有て高きと卑じと老るゝとわづか
と男おとこと女めづと富あふい貧あひきと公道こうどあると手て已やむる仕方しほうと丈せん

無きを以て信と云ふ
 智と何
 守りて心を通ぜざることを
 道と云ふ

性焉安焉之謂聖復焉執焉之謂賢

發微不可見カク充周不可窮ム之謂神トウ性ウ

經典餘考

王忠文公集卷之二

の形體なり乾の性情なり乾の健なり健は息無きを以て之を謂ふ

夫天專之を言ふ則道なり天且違むと云ふハ

分て之を言則ハ形体を以て之を天と謂主宰を

之性情乾健也健而無息之謂乾

夫天專言之則道也天

且弗違是也

聖人の道と云ふ天道なり天の道と云ふ人道なり

則以形體謂之天以主宰謂之帝

分而言之

以て之を帝と謂

功用を以て之を鬼神と謂

妙用を以て之を神と謂

性情を以て之を乾と謂

四徳の元五常の

用謂之鬼神

鬼神の夏ハ古今も春ハ万物さうく

妙用謂之神

神明の夏ハ人間の心を以て

以性情謂之乾

乾は上ハ天

四徳之元猶五常之仁

仁小猶

偏言則一事專言則包四者

天所賦為命物所受為性

言則一事專言則包四者

偏

天所賦為命物所受為性

性

性

鬼神造化之迹也

鬼神者造化之迹也

鬼神者造化之迹也

剝之為卦諸陽消

剝之為卦諸陽消

剝已盡獨有上九一爻尚存如碩大

之果不見食將有復生之理

之果不見食將有復生之理

食世見不復生之理有

食世見不復生之理有

上九亦變則純陰矣然陽無可盡之理

上九亦變則純陰矣然陽無可盡之理

於變乎則下於
生之間息容
可也一也聖
人此理を發明
以て陽と君子之道
の亡可く不
を見也

或ひの曰く剝
則純坤と為る
豈復陽有ん乎
曰卦を以て月
配する則ハ坤ハ十
月ハ當る氣の消息
を以て言則ハ陽の

變於上則生於下無間可容息也聖
人發明此理以見陽與君子之道不
可亡也

剝の䷖一ニ三四五ニ陰の上の九一ニ變
る則ハ陰純なり 又んども陽の冬ニ道理
ハ九の元ニ元て高ニ上つるニハ變て下ニ下
つるニ上つるニ上つるニ容易の間も有る
聖人右剝の卦の道理を發明して天地の陽氣と君
子仁義の道とハ一の世のありんかハ七ハ七ハ七
見りたりハ 或曰剝盡則為純坤豈復有
陽乎曰以卦配月則坤當十月以氣
消息言則陽剝為坤陽來為復陽未
嘗盡也剝盡於上則復生於下矣故

十月謂之陽月恐疑其無陽也

剝する所ハ坤と爲る
の來を復とす陽
嘗て尽未也上ハ
剝する所ハ坤と爲る
下於生矣故小十
月之を陽月と謂
其陽無りと疑
て恐て也

陰も亦然る聖
人言不耳

陰亦然聖人不言耳

ハ上九一爻の陽も剝する所ハ坤純の形
豈ハ陽とハ人の有るにどうりやとぞこの卦を以て
月ハ配する所ハ十月ハ坤の卦ハあり又月陽の氣消
息して言て言ハ陽の剝するを十月ハ坤と云ふハ十月
を一陽未復の月とハ十月の十一ハ十一月の一ハ一
きりたり嘗てより尽るに右ハ十月ハ上ハ尽るに
又ハ下ハ未復して生むるハ十月ハ陽月とハ實ハ陽
氣地下ニ入るに十月ハ陽氣の元來ハ音樂の調子ハ十月
の音ハ上ハ金ハ當るに十月ハ陽氣の調子ハ十月
陽月とハ義あり又ハ雲の諸神御留主なりといふ
神毎月とハ人々を以て神ハ陽のきりたり又ハ十月を
陽月とハ人の言
ハ陰も亦然る聖人不言耳
卦ハ同断ハ形ハ
右の坤ハ同断なりと示しハ同義あるにハ小聖人

一陽下於復、乃天地生物之心也

先儒皆靜を以て天地の心を見と爲す蓋し動之端乃ち天地之心なりと知不なり道を知者小非と孰能之を識ん

物之心也 ○一陽復於下乃天地生

氣のしるもや地中を陽とくたるの先儒

皆以靜爲見天地之心蓋不知動之

端乃天地之心也非知道者孰能識

之 先代の漢の儒者が天地の心ハ無とて自然と靜小清淨なるものとぞと人なる動と

濁りて動ハ人欲心ふまといふて汚濁りて毎て清く念ふ有るハ欲

心づき色と心と但天地のるハ物とみなし

づきすなりふるなりふるなりと動轉ハ世の定まるるなり貪りぬるなり盛るなり又さるる

仁者天下の公善之本也

感有必ず應有 仁者動有皆感 爲る感も則 必も應有る 應有る所も復 應有る所も復 應有る所も復 也感通之理ハ道を知る者黙して

○仁者天下之公善之本也

仁者天下の公善の本也 仁者天下の公善の本也 仁者天下の公善の本也

有感必有應凡有動皆爲感感則必

有應所應復爲感所感復有應所以

不已也感通之理知道者默而觀之

可也○天下之理終而復始所以恒

而不窮 仁心善心のくち厚内は動はくちを感應ありて神明はせい感通することとせん

人苟くも善を以て自ら治めば可
不者其昏愚の至
雖皆漸磨一而進
可

唯自暴の者之を
拒は信せんと以て
自棄の者之を絶
ふは不ぞ以て聖人
与居と雖化して入
る能不也仲尼の
謂所下愚也

善自治則無不可移者雖昏愚之至
皆可漸磨而進

唯自暴者
拒之以不信自棄者絶之以不為雖

聖人與居不能化而入也仲尼之所
謂下愚也

有又自暴者善道を絶棄して善道ハ不為と云ふは
所を有る者ハ聖人又ハ仙と云ふは居を
有る者ハ子の下愚との如し如來の縁なき衆生との

然も天下の
自棄自暴の者必
る非也往々強
疾ふて而て才
力の人ふ過る者
者ハ商辛是也

然天下自棄自暴者非必皆

然も天下の
自棄自暴の者必
る非也往々強
疾ふて而て才
力の人ふ過る者
者ハ商辛是也

昏愚也往々強疾而才力有過人者
商辛是也

聖人其自善
を絶てて下
愚と謂たり然
れも其歸を考
る則誠愚也

聖人以其自絶於善謂之下愚
然考其歸則誠愚也

聖人其自善
を絶てて下
愚と謂たり然
れも其歸を考
る則誠愚也

既曰下
愚其能革面何也

既曰下愚其能
面と革ハ何也

曰心雖絶於

曰心善道於絕難
 其威也畏而罪を
 寡するといへ則人々
 同也唯其人不同
 有其性之罪
 非ざることを知る
 所以也

物^{もの}は在^ありて理^りと爲^なす
を處^{ところ}とて義^ぎと
爲^なす静^{じやう}端^{たん}矣^や陰^{いん}
陽^{やう}始^{はじめ}矣^や道^{みち}を
知^し者^{もの}小^こ非^あずんば孰^{なん}
能^よ之^をを識^し

仁者にんぎや天下之正理てんかのせうり

善道其畏威而寡罪則與人同也唯
其有與人同所以知其非性之罪也

右善心義理を一旦ハうちすて見ふれども公儀の
てふりゝゝむばさういさういさ公儀の威光を畏て今
まで省しつゝをいふ處に思ふ所ハ天子人間のうらハ
善心のまじりぬ所にて性質よくつゝハあらうとぞ

在物爲理處物爲義動靜無端

陰陽無始非知道者孰能識之

一、道りハそをりて有之、それを處物する、紙さりせ
 あると、よく朝起てめさめしと、死ハ心づまりて正し、死も
 の、夫よりして目小見耳よきとて心うごたひ、よくやいな
 や貪欲心とあると、陽と陰まりと、いづれより始まる
 といふところ、知道の人よりして、
 孰れも無識とある人ありし、
 ○仁者天下之

正理を失はざる則ハ
序無而和せ不

明道先生曰天地
の物を生ずる各足
るの理無常小天
下の君臣父子兄
弟夫婦多少分と
る不處有人とを
思ふ

忠信、徳に進む所
以、なり日と終乾す
る、君子當り日と終

聖典餘節

正理失正理則無序而不和 仁の字の
二の字より天地間ニツの正氣を得て生るるをりて
人よりより人の義ありきつる人道の正理をうくるをりて
道理の序よりて今和合するをりて
乱世よりて国民のあ
らそいより大いよりて天下の
○明道先生曰天地生物各無不足
之理常思天下君臣父子兄弟夫婦
有多少不盡分處 程明道の語天地神明
より人間の為る物を
生し出する人よりいより不器なるをりて然る天下の
人ハ全從又父子兄弟あもせよ各々の持分なり忠孝義
理をよりてさるりの有て人間の
○忠信所以進
道よりて不器なるをりて
德終日乾乾君子當終日對越在天

天^{てん}小^{ちひ}在^{ある}小^{ちひ}對^{たい}越^{えつ}也

蓋上天之載フスヘ公聲フスヘ臭クサ其體ミ則之ナラフ

易と謂其理ハ
 則之を道と謂
 其用ハ之を神と謂

其^{その}人^{ひと}于^に命^{いのち}を^をさ^さる^るハ^ハ則^{すなはち}
 之^{これ}を^を性^{せい}と^と謂^い性^{せい}を^を率^{すう}
 則^{すなはち}之^{これ}を^を道^{どう}と^と謂^い道^{どう}
 之^{これ}を^を修^{しゆ}ハ^ハ則^{すなはち}之^{これ}を^を
 教^{きやう}と^と謂^い

也

孔子の人は教たまふ孝弟忠信の四ありとの多ひ
き人間の徳は進むとて此よりぞなる終日

蓋上天之載無聲無臭其體則謂

之易其理則謂之道其用則謂之神

天道の教を説くもの、先上天を仰ぐもの、臭も
る、程も限りある、その體は、易の八卦、
く、その道理を述べて、天地神明の御徳を
う、人間の教を説くもの、用ゐ、実は、思ふ、

神明とハリとあり

其命于人則謂之性率

性則謂之道修道則謂之教
人^{人間}性^性
うけ^{うけ}て^てそ^その^の

生るゝに仁義礼智の道を受けて性質とす
 人の世界と云ふ義理をたゞむる天地と云ふ人

孟子其中より去
て又浩然の氣を
發揮し出さるる
謂可矣

謂盡矣

中庸の詭を去りてきてとる美其
於去とる四字の意とるハとる一板此章の

心ハ元^{もと}テ人^{ひと}間^まハ心^{こころ}氣^きちまゐるを以て能^{あた}道^{みち}を悟^{さと}とす
浩然^{こうぜん}と云^い氣^き色^{いろ}のびくとして心^{こころ}よさうくしてさうなるなりと云^い

叔又心のとゞりやぬと云々きこ不ふ足たるる死しゆゆなりなりたとたとてて朝あさ
かきて文ぶんあつりて吾われう一日いちにちの間言まことと行いとよよつつも私わたくしるる恥はづかし

一、此を浩然の志といふなり、孟子
 の此一言こそ中庸の意を發揮して教の道を尽すなり

故不説く神其上
小在が如く其左右小
在とが如く大小の大
小而只誠之捨可

小大事而只曰誠之不可揜如此夫

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

若諸君之已不有也
至不所あらん

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

可也巳と曰

然性中元有此兩物相

對而生也

有自幼而善是氣稟有然也

也然惡亦不可不謂之性也

蓋生之謂性人生而靜以上不容說

才說性時便已不是性也

蓋生之謂性人生而靜以上不容說

才說性時便已不是性也

蓋生之謂性人生而靜以上不容說

才說性時便已不是性也

蓋生之謂性人生而靜以上不容說

才說性時便已不是性也

蓋生之謂性人生而靜以上不容說

才說性時便已不是性也

蓋生之謂性人生而靜以上不容說

才說性時便已不是性也

此理ハ天命也順而之
循ハ則道也此道
而之を脩め各其分
を得則教也天命
自以て教於至我加損
焉此舜天下を有
而子不焉者也

天地物を生する氣
家を觀万物生意
最觀可此元者善之
長也斯所謂仁也

天命也順而循之則道也循此而脩
之各得其分則教也自天命以至於
教我無加損焉此舜有天下而不與
焉者也

○觀天地生物氣象○萬
物之生意最可觀此元者善之長也
斯所謂仁也

滿腔子是惻隱
之心

天地萬物之理
無不備於我
然子而然安排有
小非ざる也

中夜以思
不知手之舞之
蹈之也

中者天下之大
本夫

○滿腔子是惻隱之心
物之理無獨必有對皆自然而然非
有安排也

每中夜以思不知手之舞之
足之蹈之也

○中者天下之大
本夫

地之間亭亭當直上直下之正理出則
是之惟敬而
失之無最盡

伊川先生曰公則
則一私則則萬殊
人心同而不
只是私心

本天地之間亭亭當直上直下之
正理出則不是惟敬而無失最盡

○伊川先生曰公則
中正之理最行
一私則萬殊人心不同如面只是私

心
君子之行公通
一私則萬殊人心不同如面只是私

凡物有本末不可分
未為兩段事洒掃應對是其然必有
所以然

○凡物有本末不可分
未為兩段事洒掃應對是其然必有
所以然

楊子拔一毛不為墨子又摩頂放踵
為之此皆是不得中至如子莫執
中欲執此二者之中不知怎麼執得

○楊子拔一毛不為墨子又摩頂放
踵為之此皆是不得中至如子莫執
中欲執此二者之中不知怎麼執得

子莫中執如
中至之此二者之中不知怎麼執得

楊子以下三人的學風
中至之此二者之中不知怎麼執得

識得たる則事々
物々の上皆天然箇

中ちゆう有あり那な上うへふ在あ人ひとの
安あん排はいまゝに紙し待まち
不ふ也や安あん排はい一いち著ちやくい
る則すなはへ中ちゆうまゝ不ふ矣や

問時とくとく中ちゆうををるること
如何いかん曰いふ中ちゆうの字じ最も識し
難がた須すく是これ默もく識し心しん

學問ハ吾爲ふするものなり。解して身て修人を治る道なり。
 を知らばこれこそを養ふの道なり。人の爲は拔てあがるといへ
 ざるなり。墨子の學風ハたゞ頂の摩りより豆の彈先まで
 人の吾のなごてを吾父母も人の父母も吾子も人の子も同断ふ
 事なり。そのつとつ仕方なれば親疎親の分ちる子莫先
 生ハ右揚墨二者の真中を取て中庸の中のや心得ざる
 執得するは知まじとす。

識得則事事物物上

皆天然有箇中在那上不待人安排

也安排著則不中矣

中庸の道を識得するは
 事々をはうい物々めて

あつてもその那の上の箇中の道の具足して自然に右
 左のさうなる人候とて安排加減をすといふはさうびも
 心をなやむうげに執着

〇問時中如何曰

中字最難識須是默識心通且試言

問時中如何曰

中字最難識須是默識心通且試言

通し且ツ試一廳

為一家之則廳の中
中非て堂の中

為一國を言則ハ
堂中ハ非ズ而國

之中と爲此
類を推て見可矣

三其門を過入不_レが

如し、禹稷の世小在
て、中と為陋巷小

居き若わ則すなは中ちゆう日にち非ひ也なり
 陋ろう巷かう小きよ居き以もつ顔がん子し
 之の時とき在あつハ中ちゆう為なり

經典餘師

一廳則中央爲中一家則廳中非中而堂爲中言一國則堂非中而國之中爲中推此類可見矣

ある人程先生は同ふ侍るに時々も中を最上さとしが如何かやと程子の答ふは中の義は心ふあひんと感通する心試みて見るといへたといふ一の廳の中央を中に見るといふその一家のことすの座席より一國中よりいとて右の家堂ハ行寄りて中よあらざる子莫先生の申と同断之此理を推きはりて見知べし

如三過其門不入

在禹稷之世爲中若居陋巷則非中也居陋巷在顏子之時爲中若三過

經典餘師
近思錄卷之

一

此の如く須生有
便死有始有便
終有

始便有終

易の理の滯留息よりて易の復
の卦より六十月の一陽復来の卦より先正

月天下泰平の卦より二月大壯の卦三月夬四月乾五月
垢六月遯七月否八月小畜九月大畜十月坤より

陽氣地中入て寒氣地上よりて依て上無月より
音樂の調子より上全より又七日を吊紀より陽氣

又天より復りて再二人体を得て地の獄より復るより
又天の元気の断る續より又返るより天地の万物より

ありと有る又死する始ある終ある
ありと有る又死する始ある終ある

明道先

告曰天地之間只有一箇感應應而

已更有甚事

物事の始終の事の往来より物に感ずる
と事より應ずるの外に甚事も有り

問仁

仁を問

伊川先生の曰く此
諸公不在自ら之を
思ふ聖賢仁を言
所の處を將て類
聚して之を觀て體
認出來

伊川先生曰此在諸公
自思之將聖賢所言仁處類聚觀之

體認出來

言曰所をあれち類聚て吾身に體解て認うんぐみ
バ自然と悟ぞ出來るなりそのこと左のづと

孟子曰惻隱之心仁也後人遂以愛

爲仁愛自是情仁自是性豈可專以

愛爲仁孟子言惻隱之心仁之端也

既曰仁之端則不可便謂之仁退之

言博愛之謂仁非也仁者固博愛然

未發而中節則無往而不善故凡言
善惡皆先善而後惡言吉凶皆先吉
而後凶言是非皆先是而後非

問心是善惡有否曰
天在在命在在為
物在在理在在為
人

善惡否曰在天為命在物為理在人
為性主於身為心其實一也心本善
發於思慮則有善有不善若既發則
可謂之情不可謂之心譬如水只可
謂之水至如流而為派或行於東或
行於西却謂之流也

性天於出才氣於
出氣清則才清
氣濁則才濁才清
則善有不善有性
則善

性出於天才出於
性氣清則才清
氣濁則才濁才清
則善有不善有性
則善

不善無○性者自
然完具是信只
是此有者者也故
四端信を言む

心ハ生道也
ハ斯く是形と具
て以て生ず側隱
の心ハ人の生道也

横渠先生の曰く

善有不善性則無不善○性者自然
完具信只是有此者也故四端不言

信天より受て生ずる性を性といふ性の動くこと
るを智といふ是上より氣質より出たりそれゆゑ

天より自然のりのるがゆゑ四のりの完く具足す去れど
も仁義礼智と四名より信ハ信の字の義ハ即ち
伸るなり右仁義内は備るが故その
まの外面へあらはれて出るなり ○心生道也

有是心斯具是形以生側隱之心人
之生道也人の生て有るは陽氣をまづりて
心有此形は具物なり仁心の主人なり

横渠先生曰氣

氣塊然として太
虚に升降飛揚
して未と嘗て止息

せ未此虚實動靜
之機陰陽剛柔之
始めり清而上者

陽之清るる降
而下者陰の濁
るなり其感遇聚結

風雨と為霜雪と
為萬品之形と流
山川之融結糟粕

煨燼教は非ざる
こと無き也

塊然太虚升降飛揚未嘗止息此虚
實動靜之機陰陽剛柔之始浮而上
者陽之清降而下者陰之濁其感遇
聚結為風雨為霜雪萬品之流形山
川之融結糟粕煨燼無非教也

るる陽氣太虚より浮て飛揚て又降のり止
息して一と一と虚より一と一と動と静と
の機發して陽の清と陰の濁とるる是より始出生
て間ハ清と濁と清く濁く下より上へかへり感
遇て聚り結ぶれば風雨と霜雪とるる萬品の形なり
れわたりて結びて山となり融通して川となり煨燼と

きハ糟粕とるるの理をさるる
○游氣紛擾合

質成者人物之萬殊其陰陽兩端者天地之大義也

天物一體而遺不猶仁幸一體而在不無猶也仁儀三百威儀三千一物而仁非仁也無也

昊天曰明及爾出王

而成質者失人物之萬殊其陰陽兩端循環不已者立天地之大義

○天體物不遺猶仁體事而無不在也禮儀三百威儀三千無一物而非仁也

昊天曰明及爾出王

昊天曰明及爾出王

出王昊天曰且爾及游行一物之體不無也

鬼神者二氣之良能也

物之初生也

昊天曰且及爾游行無一物之不體也

○鬼神者二氣之良能也

生氣日至而滋息物生既盈氣日反

生氣日至而滋息物生既盈氣日反

反而遊散至之謂神以其伸也反之謂鬼以其歸也

而遊散至之謂神以其伸也反之謂鬼以其歸也

性者萬物之一源非有我之得私也惟大人為能盡其道是故立必俱

性者萬物之一源我之得之私也惟大人有非也惟大人能其道也

立知必周知愛必兼愛成不獨成彼自蔽塞而不知順吾理者則亦未如

之何矣

大極用時之理也

成之彼自蔽塞也

之何矣

一故神譬之人身四體皆一物故

觸之而無不覺不待心使至此而後

覺也此所謂感而遂通不行而至不

疾而速也

天地神人一體

通而不速也

疾而速也

